紀要 41

第41号　2016年　京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部

研究論文

■ 円山応挙「氷図屏風」考　佐々木正子
■ 杜甫の「侘」と芭蕉の「わび」　佐野　仁志

研究資料・調査報告

■ 味と匂い研究会2015年度活動報告　岩﨑　陽子
■ 香りと見えないもの―日本文化における「中心の不在」（講演記録）　岩﨑　陽子
■「有松絞り」の認知度・印象に関する海外アンケート調査および海外進出「有松絞り」ブランドへの聴取調査　上田　香・藤木　庸介・宮尾　学
■ 香りによるユニバーサルデザインを考える　坂田　岳彦
■ 京都嵯峨芸術大学学生の体格・体力に関する研究　―過去10年間における年次推移（2004～2013）―　増田　洋・村上　博巳

教育実践活動報告

■ 香りのアート／日仏学生交流　―京都とパリ　岩﨑　陽子
■『芸術の力』「循環＋波動」＋『芸術的磁場の創造』（活動報告）　篠原　猛史

制作報告

■ 具体物からの3Dデータ作成、造形と課題　楠林　拓・西澤　智子

目次

― 研究論文

円山応挙「氷図屏風」考　…佐々木正子　1

杜甫の「侘」と芭蕉の「わび」　…佐野　仁志　5

― 研究資料・調査報告

味と匂い研究会2015年度活動報告　…岩﨑　陽子　15

香りと見えないもの―日本文化における「中心の不在」
（講演記録）　…岩﨑　陽子　19

「有松絞り」の認知度・印象に関する海外アンケート調査および
海外進出「有松絞り」ブランドへの聴取調査
…上田　香・藤木　庸介・宮尾　学　25

香りによるユニバーサルデザインを考える　…坂田　岳彦　33

京都嵯峨芸術大学学生の体格・体力に関する研究
―過去10年間における年次推移（2004～2013）―
…増田　洋・村上　博巳　39

― 教育実践活動報告

香りのアート／日仏学生交流　―京都とパリ　…岩﨑　陽子　51

『芸術の力』「循環＋波動」＋『芸術的磁場の創造』
（活動報告）　…篠原　猛史　55

― 制作報告

具体物からの3Dデータ作成、造形と課題　…楠林　拓・西澤　智子　63

京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部　紀要　第41号

味と匂い研究会2015年度活動報告

岩　﨑　陽　子

０．2015年活動概要

当研究会は、五感の中でも比較的先行研究の乏しい「味覚」と「嗅覚」を取り上げ、それらの特性を検証した上で、感覚による世界認識の新たな在り方を、アート・デザインのかたちで提言することを目的として2012年４月に設立された。

現メンバーは京都嵯峨芸術大学の教員である真板昭夫（観光デザイン）、坂田岳彦（デザイン）、岩﨑陽子（哲学・美学）が中心となり、かつ学外からも井上健司（株式会社松栄堂）、井上貴元（味香り戦略研究所）各氏を加えた構成員から成る。

前年2014年度は、京都市営地下鉄主宰の駅ナカアート2014での香りのアート出展、フランスのパリ第一大学のKODOプロジェクトにおける国際会議発表、イタリア・フランスへの海外調査実施、健光園における「匂いによるユニバーサルデザイン」の作品制作、2015年３月に開催された京都国際現代芸術祭PARASOPHIAに併せて開催する匂いアートプロジェクト「パリ・ボザール学生との香りアート交流」企画・準備など、香り・匂いに関わる多彩な研究活動を精力的に実施した。

今年度は、本研究会のメンバーで獲得した科研のテーマでもある、『匂いによるユニバーサルデザイン』研究の３年間にわたる研究の最終年度であった。これまで実施したプロジェクトを、科研最終年度の総まとめとして位置づけ、外部にも様々なかたちで成果報告していくことを目標とした一年であった。

また前年度にも増して海外との連携を強化し、学生交流や講演会など、特にフランス・パリでの活動を精力的に行った。その最中の2015年１月、そして11月にもパリでイスラム国によるテロがあり、プロジェクト自体の存続も含めて危機を感じることは多々あった。しかしながら、多くの方々の援助と期待を受けて計画通りにプロジェクトを実施することができた。

今年度の主な成果を挙げる。

①Perfume Art Project @Kyoto
②健光園における「匂いによるユニバーサルデザイン」の作品制作、スタッフアンケート実施
③学会成果発表（坂田・岩﨑）・講演会実施
④Perfume Art Project @Paris
⑤香りのアート展覧会「黒髪とマドレーヌ」開催

以下順に上記５点について詳述する。

１．Perfume Art Project @Kyoto

香りのアート理論構築に資するための活動として、京都とパリで学生交流を実施した。パリ・ボザールの川俣正ゼミの学生11人を招き、京都嵯峨芸術大学の学生25人と共に香りのアートの共同制作を実施した。また、この成果を京都市内５か所に展示した。

これら一連の活動の詳細に関しては、本紀要内の研究活動報告の中で報告を行っている。（岩﨑陽子「香りのアート／日仏学生交流　―京都とパリ」51～54頁）

２．健光園における「匂いによるユニバーサルデザイン」の作品制作、スタッフアンケート実施

2013年度に行った、香りと記憶に関わるアンケート調査の結果を用いて、本学向かいに位置する高齢

者施設・健光園における入居者とスタッフのために「匂いによるユニバーサルデザイン」を構想し、それに何が必要かを考察してきたが、本年、ようやくその一つのモデルとして「モビール」に注目するに至った。その理由について以下に簡単にまとめる。

テーマがUD（ユニバーサルデザイン、以下UDと表記）なので、幅広い年齢層に受け入れられやすい（そして幼稚すぎずに高度すぎない中間の）造形物を模索した結果のオブジェであった。モビールは大人のための見栄えのするものは数万円するものがあり、子供向きの安易なものから、かなり造形的に凝って作ることも可能である。

匂いの仕掛けについて、いつも問題になるのがメンテナンスであった 。電源が必要なものは入り切りに毎日手を取られるので、結局使わなくなる。その点、モビールは風を受けるものであり、必然的に香りを電源なしにゆるくまき散らすことのできるすぐれた装置になり替わる。

また今回は施設入居者の中の「寝たきり」の方も想定した。造形物は普通、座るか立つかして鑑賞する。でもモビールは寝たきりの人でも、寝たまま見ることができる。動きのない天井に、微風でもゆらぐモビールがゆれることによって、日常生活にアクセントがつかないか、という狙いである（裏目に出て、視界にユラユラうるさい、ということも考えられるが）。その上匂いが風向きによって漂ってくれば、寝たきりの方に良い刺激にならないか、ということも考えた。

また本来の目論見では、モビールに使う 材料を入所者の人と学生が交流しながら揃えていく（一緒に散歩で川に流木を拾いに行くなど）といった案もあったが、今回は実施がちょうど梅雨ということで、気候がよくないのでその部分は割愛した。

モビール作成にあたって、最初に学生有志によってモビールの造形案を数パターン提出してもらい、それを健光園の方々に選定していただいた。その上で、学生が選定された２パターンのモビールを作成、実際に入所者の居室とデイ・サービスの部屋にも２週間程度設置した。

このモビール設置前後の居室居住者の反応について、常駐の施設スタッフにアンケートを実施し、その結果を集計した。

この総合的な成果の詳細については坂田岳彦が意匠学会にてパネル発表を実施した。本紀要内でその報告がなされている（坂田岳彦「香りによるユニバーサルデザインを考える」33～38頁参照）

また学内でもこの件についての研究会を開催し、成果を公表した。

３．学会成果発表（坂田・岩﨑）・講演会

３年間の科研研究『匂いと味によるユニバーサルデザイン』の締めくくりの年度を意識し、対外的な成果報告と、講演会による知見公表を積極的に実施した。

成果発表としては、坂田岳彦と岩﨑陽子はそれぞれ学会にて成果発表を行った。前述のように坂田岳彦は2015年７月26日の意匠学会で「香りのUDを考える」という題でパネル発表を行った。これは健光園でのモビール制作について成果報告を行ったものであった。岩﨑陽子も岐阜で開催された日本味と匂い学会にて*A report on an investigation and study of the memories with the smell of the aged: from a point of view of the universal design by the smell*と題して英語のポスター発表を行った。これは2013年度に実施した健光園での「香りと記憶」のアンケート結果について分析したもので、研究者を始めとして企業の方や一般の来聴者にも多く質問を受けた。

また、本研究の導入した知見を広く普及することを目的とし、一般にも公開する形式で、2015年12月18日、19日の２日間にわたって、香りの展覧会のために来日していたフランスの匂いの造形作家Boris RAUXと石垣島在住の香りアーティストのMaki UEDAによる「香りについて考える」と題した講演会を、本学と同志社大学で行った。彼らの香りアートの取り組みやその基本となる匂いについての考え方は、香りと空間の在り方について深く考えるきっかけとなった。これには本学の学生だけではなく、外部の企業や一般の人々の聴講があり、活発な質疑応答が展開された。

４．Perfume Art Project @Paris

春の香りのアート学生交流に引き続き、今度は京都嵯峨芸術大学の学生がパリに出向き、現地で制作を行って展覧会を開催するという研究会主催の海外研修も実施した（笹川日仏財団の協賛）。岩﨑が本学の学生5人を連れ、10月末から11月初旬にパリのBoris RAUXの自宅に滞在して制作と展示の準備を行い、最終的にはボザールの学生と共にパリ国際大学都市日本館でForme d'Odeur展という交流展覧会を行った。

これら一連の活動の詳細に関しては、本紀要内の研究活動報告の中で報告を行っている。（岩﨑陽

子「香りのアート／日仏学生交流　―京都とパリ」51～54頁）

５．香りのアート展覧会「黒髪とマドレーヌ」開催

本展覧会では、国際的な香りのフランス人アーティスト、Boris RAUX（ボリス・ロ）と石垣島在住の香りアーティストMaki UEDAを招き、岩﨑陽子によるキュレーションで京都を舞台に香りの芸術交流を実施した（三人は、パリでの嗅覚創造に関する講演会「香り芸術の美学」、パリ日本文化会館、2015年５月９日で直接出会い、香りをテーマとした日仏交流の可能性を探ってきた）。

三人の対話や制作を通じて日仏の香りや匂いに対する感覚の差異や共通項を切り出しつつ、嗅覚アートの可能性を探究した。

【展覧会概要】

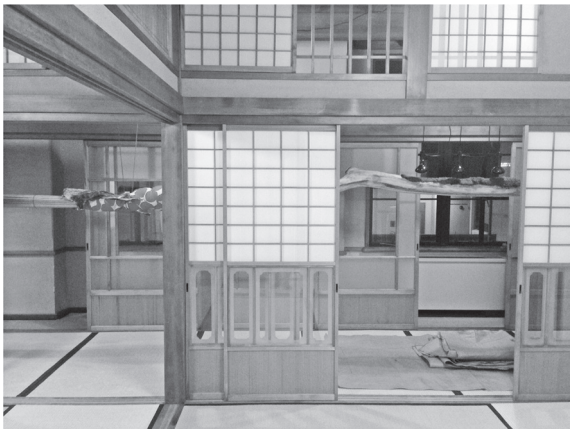
黒髪とマドレーヌ展
香りのアート　京都×Paris

Boris RAUX　Maki UEDA
Curator　Yoko IWASAKI

2015年12月19日（土）－12月27日（日）
京都芸術センター　４階和室「明倫」

共催：京都芸術センター
協力：東山アーティスツ・プレイスメント・サービス（HAPS）、常松庵

この展覧会は世界でも特に香り／匂いに敏感で、洗練された文化を育んできた日本とフランスの二人の現代アーティストを京都芸術センターに招いて実施した展覧会であった。

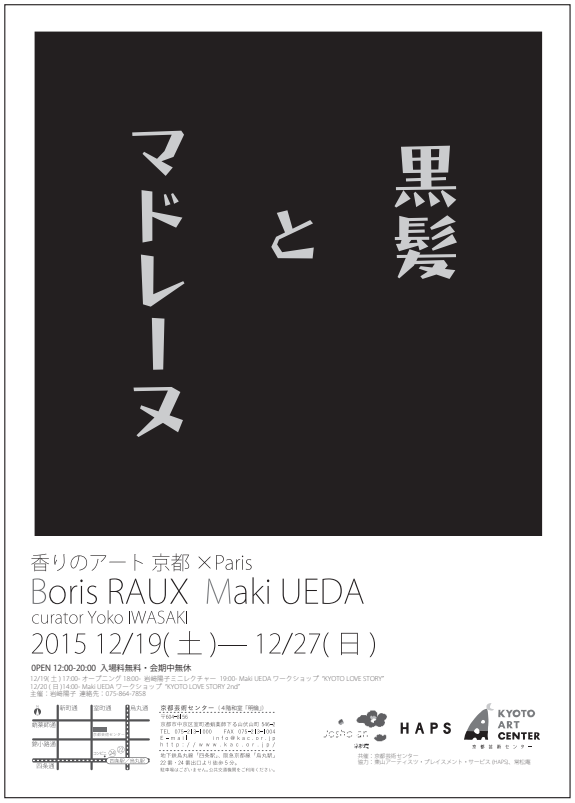


Boris RAUX《Acheval entreles modes, 2015》

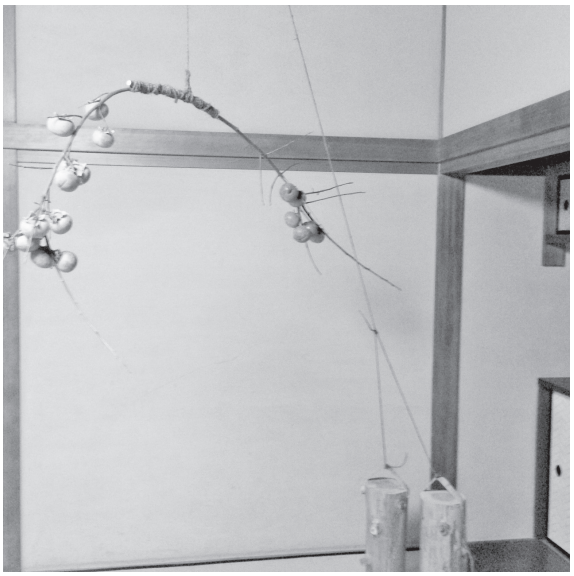
Boris RAUXは匂いと社会との問題に10年近く前から取り組み、匂いを使ったインスタレーション作品を発表してきた。彼は2015年の年明けから３か月間、フランスの香りの街・グラースの国際香料博物館で個展を終えたばかりであり、今現在注目の嗅覚アーティストである。今回、初来日が実現し、2015年12月１日にパリから直接京都に入って、京都の匂いをリサーチした。彼は京都の街を歩きながら、地元の人なら気にも留めなかったものに興味を示して「これは何か、何に使うのか」と聞いて嗅いでいたが、その好奇心が京都芸術センターの和室という特殊な空間をうまく取り込んだ作品制作につながった。また　彼は大変京都が気に入り、これから数年にわたって幾つかのステップで京都の街を嗅覚アートで表現していく予定を計画し、今回の展覧会はその第一歩であった。

Maki UEDAはオランダと石垣島在住の、同じく嗅覚アーティストである。彼女は自分自身で香りを抽出して作品に使うことが出来る稀有な才能の持ち主で、香りを使ったインスタレーションだけではなくワークショップも多く行い、その発想力の豊かさと匂いに対する洞察の深さは他の追随を許さない素晴らしいものである。

今回はBorisが京都に来ることを意識し、あえて



《展覧会フライヤー》



Boris RAUX《L'arbre perché》

Maki UEDA《KYOTO LOVE STORYより》

フランス的な感性にぶつけるもの、そしてまた香道発祥の地、京都を深く感じさせるものとして『源氏物語』を作品テーマに選んで「KYOTO LOVE STORY」というワークショップを企画した。香りの儚さを体現するために、Borisとは対照的に、あえて物としての作品作りではなく、「今・ここ」にある雅やかな世界観を楽しむ空間制作の仕掛けを行ったのである。

この展覧会は、これまでの香りとアートやデザインを考える上での様々な知見や技術のある種の集大成となるようなものであった。１週間ほどの展示であったが、京都芸術センター内であったことから多くの鑑賞者に恵まれ、盛況のうちに閉会した。

６．味と匂い研究会、今後の展望

以上のように、2015年度の味と匂い研究会は、本学の四大・短大・専攻科・院生といったすべての領域の学生を巻き込みながら、昨年度に引き続き活動の場を海外に広げ、精力的に研究活動をすすめることができた。また、科研の取り組みの集大成として学会発表や、出版（岩﨑陽子監訳、シャンタル・ジャケ著『匂いの哲学』晃洋書房、2015年８月）も叶い、充実した一年となった。

しかしながらやはりこうした活動を通じて痛感するのは、世界においても日本においても香りへの関心は高いものの、まだまだそれが芸術へと結びついていることは極めて稀であること、その意識すら稀薄であることであった。また芸術だけではなく、それを医療や介護の現場に取り込むことも未だ先端研究的な取り組みであり、先行研究例が極端に少ないということであった。

そのために研究が思うように進まなかったり、基礎研究や知見導入にかなりの時間と労力を割いたりする必要性があった。特に匂いについてはかなりの研究成果が出せたが、味についてはそれに付随するかたちでしかまだ研究が進んでいないことが今後の課題として挙げられる。

しかしながら先行研究の少なさについては、裏を返せば今後の発展が大きく見込める領域だということでもあり、日本だけではなく世界に点在する、香りをアート・デザインに取り込もうと奮闘している同志たちと連携を取りながら、引き続き来年度も活発に活動していく予定である。

Le parfum et l'invisible : le « décentré » dans la culture japonaise

Yôko IWASAKI

Enchantée. Je m'appelle Yôko Iwasaki, et j'enseigne l'esthétique et les théories de l'art à l'université des Beaux-Arts de Saga, à Kyôto. J'ai créé un groupe de recherche, « le groupe de recherche du goût et des odeurs », qui étudie l'odorat, le goût et l'art ; mon rôle consiste à en él aborer les théories. J'effectue également des recherches sur le *kôdô*, pour réfléchir aux liens entre art et parfum. Le *kôdô* est un art unique au monde basé sur les parfums et qui condense l'élégance de la culture japonaise.

Je suis extrêmement honorée de pouvoir parler aujourd'hui, ici à la Maison de la culture du Japon à Paris, d'art et de parfum.

Je souhaiterais tout d'abord remercier chaleureusement les personnes qui sont venues ici aujourd'hui, ainsi que madame Akiko Ishii, qui a organisé cet événement, et toutes les personnes qui ont participé à la réalisation de cette table ronde.

Création en collaboration et images des œuvres exposées

Dans le cadre de PARASOPHIA, festival d'art contemportain de Kyôto, j' ai organisé le « Perfume Art Project », échange de création artistique entre étudiants des Beaux-Arts de Paris et des Beaux-Arts de Saga pour une exposition qui se tient depuis le 7 mars dernier et se terminera demain. Ce projet consistait à inviter des étudiants des Beaux-Arts de Paris pendant deux semaines à Kyôto et les faire travailler avec des étudiants japonais sur le thème de l'« art olfactif ».

Vous pouvez voir en photo les œuvres des étudiants français et japonais. Elles sont actuellement exposées dans cinq lieux différents à Kyôto. Cela a été une exposition fabuleuse. Le rapport à l'art olfactif, comme les créations en elles-mêmes, étaient très différentes entre Français et Japonais. Je reviendrai sur ce point à la fin de mon intervention.

Œuvres d'art olfactif des étudiants Japonais et Français

Pour créer des œuvres d'art olfactif, les étudiants doivent se fonder sur les caractéristiques des odeurs et en tirer parti. Tous les étudiants, Japonais comme Français, se sont réellement creusé la tête.

Les odeurs n'ayant pas de limite spaciale, il est également difficile de définir un début et une fin du point de vue temporel. En comparaison avec les arts plastiques, qui ont un contour spacial, s'inscrivent dans une certaine durabilité et peuvent être reproduites en tant que représentation, l'art olfactif n'a pas de forme ni de contour, disparaît instantanément et il est difficile de la reproduire en tant que phénomène visible à l'œil nu.

Scènes de kôdô / Expérience de l'« écoute » de l'encens

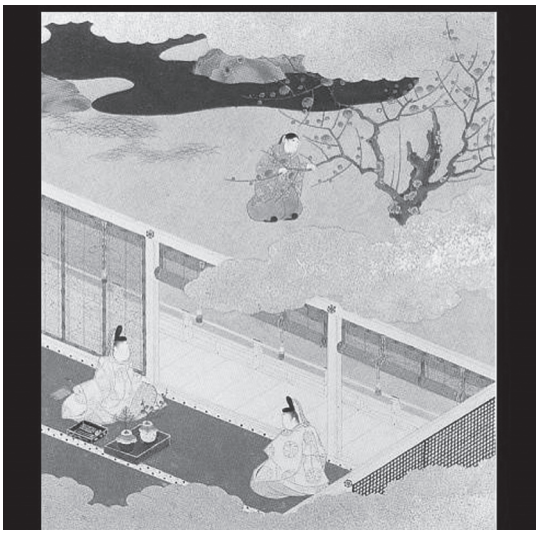
Dans le cadre de cet échange entre étudiants japonais et français autour de l'art olfactif, je tenais à faire découvrir aux étudiants venus de France cette culture du parfum japonaise qu'est le *kôdô*. Le *kôdô* est un art né au XVe siècle qui consiste à s'élever spirituellement à travers l'appréciation de *kôboku*, bois odoriférants, ce qui lui confère un aspect de formation morale et spirituelle. De même que le *sadô*, la cérémonie du thé, ou le *kadô*, l'arrangement floral, c'est un art essentiel du Japon et c'est également l'unique art au monde qui considère, depuis les temps anciens, l'odeur comme un art.

J'ai emmené les étudiants français, quelque peu désorientés par la création d'art olfactif, dans une très ancienne boutique d'encens afin de les initier à l'expérience de l'« écoute » de l'encens. En assistant à une conférence sur les sentiments des Japonais vis-à-vis de l'encens et des parfums, les étudiants français ont été touchés par la profondeur de la culture du parfum au Japon. Et ils m'ont dit plus tard qu'ils avaient découvert de nouvelles possibilités relatives à l'art olfactif, qui ne s'appuieraient pas sur des objets plastiques ou des représentations visibles à l'œil nu.

L'encens comme divertissement (rouleau dessiné du Dit du Genji)

La culture du parfum est arrivée dans ce pays insulaire qu'est le Japon à la fin du VIe siècle, ce qui correspond à peu près à la période où le bouddhisme a été introduit du continent. La culture du parfum est arrivée de Chine en tant que rituel religieux. Chantal Jacquet parlera ensuite de la culture du parfum en France, mais nous pouvons déjà dire qu'en Orient comme

en Occident, le parfum avait trois aspects utilitaires : premièrement, il était utilisé dans un cadre religieux, deuxièmement dans un but hygiénique d'« effacement des odeurs » et troisièmement pour séduire l'autre.



Cependant, concernant le lien entre culture japonaise et parfum, il est important de mentionner qu'au Japon, l'encens s'est éloigné très tôt de l'aspect utilitaire pour devenir un divertissement. Déjà, dans le *Dit du Genji*, œuvre de la littérature classique japonaise du XIIe siècle, sont décrits des jeux comme le *taki awase*, où les nobles se livrent à un concours d'élégance après avoir mélangé eux-mêmes divers parfums comme le santal ou le bois de jinkoh afin de créer un parfum original issu d'un processus complexe.

Scènes de kôdô / l'univers du genjikô

À la fin du XVe siècle, ces amusements de nobles ont évolué, des règles ont été établies, et c'est ainsi qu'est né le *kôdô*, avec le *sadô* et le *kadô*.

Dans le *kôdô*, on joue à un jeu appelé *kumikô* qui utilise de l'encens. Le jeu consiste à brûler plus de deux variétés différentes d'encens que l'on va devoir différencier, et les participants vont partager un univers d'images inspiré des *waka* et de la littérature classique soulevés par le parfum des encens. On dit que ces *kumikô*, inspirés, au gré des quatre saisons, d'œuvres de la littérature classique comme *Le Dit du Genji* ou les *Contes d'Ise*, des cérémonies de saison comme le festival *Aoi* ou le rituel *Kurabe uma*, se déclinent actuellement en plus de sept cents variations.

Image du genjikô / un motif en tant que dessin

Parmi les variations de *kumikô*, le *genjikô* est particulièrement complexe et de haut niveau. Le motif qui y est utilisé est le *genjikô no zu*. Concernant la façon de jouer au *genjikô*, veuillez vous reporter au document qui vous a été distribué. Le *genjikô no zu* est composé de cinq traits verticaux qui indiquent les cinq différentes senteurs et, au-dessus, les traits horizontaux qui les relient les uns aux autres, le tout offrant un design simple mais de toute beauté.

Dans le *genjikô*, il ne s'agit pas de rivaliser et d'avoir le plus de bonnes réponses, mais le but consiste à goûter au plaisir, tous ensemble, à travers les parfums, d'évoquer les images élégantes des rouleaux illustrés de la période Heian.

Simplicité du genjikô no zu et richesse du contenu / utilisation du genjikô no zu comme motif

Le charme du *genjikô no zu* se trouve dans son motif simple et géométrique, et en même temps très présent, et dans l'univers littéraire plein de richesse qui se trouve en arrière-plan. Ainsi, le *genjikô no zu* a pris son autonomie par rapport au motif utilisé dans le *kumikô* et a commencé à être utilisé comme motif pour les pâtisseries japonaises, les kimono ou encore les objets d'art.

Je pense qu'on trouve dans ce *genjikô no zu* l'essence de la culture japonaise. Le *Dit du Genji* est une peinture sur rouleau sur le thème de l'amour éblouissant entre un prince et les femmes qui l'entourent, et c'est également un chef-d'œuvre décrivant la fugacité de la vie, son éphémérité pareille à un rêve. Cette sensibilité qui a relié chaque chapitre à ce motif géométrique simple qu'est le *genjikô no zu*, est particulière à la culture japonaise. Elle exprime sous la forme la plus petite possible un contenu infiniment grand.

Le « décentré »

D'un point de vue traditionnel, l'art japonais attache de l'importance au blanc dans la peinture et dans l'écriture, ainsi qu'à la distance temporelle dans le nô ou encore dans la musique *hayashi*. Dans l'art japonais, les blancs spaciaux ou temporels ont parfois un sens plus important que les phénomènes décrits, les paroles ou les sons en eux-mêmes.

À ce propos, l'essai sur la culture japonaise *L'Empire des signes* de Roland Barthes, qui s'est rendu dans diverses régions du Japon lors de séjours de plusieurs mois dans le cadre de missions culturelles françaises entre 1966 et 1968 rend bien compte de l'élégance de la culture japonaise vue par un philosophe français.

Barthes a défini la particularité de la culture japonaise comme une culture du « décentré ».

En Occident, les gestes et les paroles revêtent tous un « sens » qui demande une interprétation précise. Il est demandé d'assembler les choses de manière logique, en direction du sens central. Cependant au Japon, que ce soit dans la peinture, la littérature, le théâtre ou encore la gastronomie, cette partie centrale la plus importante est comme « énucléée », telle un donuts. C'est à nous de mettre du sens dans ce vide.

Le décentré dans la peinture / le bois de pins de Hasegawa Tôhaku

Le « décentré » est visible de façon manifeste dans l'expression de l'espace dans la peinture japonaise. Pour citer un exemple, le peintre Hasegawa Tôhaku, qui réalisait des lavis, a représenté un bois de pins, mais ce qu'il cherchait à représenter n'était pas la forme des pins, mais l'air froid du début d'hiver, couvert de brouillard, à travers les blancs. De la même manière, les fontaines à eau en bambou des jardins japonais sont un dispositif destiné à écouter le silence entre deux sons, contrairement aux fontaines d'Occident.

Le décentré dans le haiku

Concernant cette absence de sens central au Japon, l'exemple le plus représentatif que Barthes s'est évertuer à donner, c'est cette forme de poème court japonaise qu'est le haiku.

Pleine lune
Et sur les nattes
L'ombre d'un pin.

Il s'agit d'un poème de Kikaku, auteur de haiku de l'époque d'Edo. Barthes y voit là une absence de sens, come si un enfant ne faisait que pointer du doigt quelque chose en disant « ça ! ». Cette courte œuvre littéraire dépourvue de description et de définition n'a aucun sens central.

Tout en construisant un monde où sont disséminés des mots connus de tous tels que « lune » ou « pin » dans un style extrêmement concis de cinq, sept et cinq syllabes, le haiku fait en sorte qu'on ne puisse ni former, ni contrôler, ni achever cet espace. Au final, le haiku consiste à porter un « blanc » qui n'indique volontairement pas le contenu qu'on est censé inclure dans un mot et à laisser vide la distance entre chaque mot, sans les relier les uns aux autres par du sens.

Parfum et décentré

Ce concept de « décentré » de la culture japonaise qu'a observé Barthes est visible dans le Genjikô no zu que nous avons évoqué précédemment.

Plutôt que de décrire de manière linéaire le contenu du *Dit du Genji*, cette opération consistant à « effacer doublement le centre » en rendant abstrait le monde du *Dit du Genji* par les parfums et en transformant cette abstraction en signes simples, laisse davantage d'« espace pour l'imagination ».

Le parfum possède cette force d'abstraction. En formant, à travers le parfum, du vide spatial et temporel et en effaçant le centre, les gens y trouvent au contraire une force centripète, un champ magnétique qui les attire.

Par cette absence de centre, le parfum, invisible à l'œil nu, ouvre de grandes possibilités artistiques. De même, ce principe est visible depuis les temps anciens dans cet art olfactif japonais qu'est le *kôdô* ; il se transmet à notre insu, jusqu'à aujourd'hui, dans la culture japonaise. La différence d'approche dans l'art olfactif entre étudiants japonais et français, que j'évoquais plus haut, se trouve ici aussi. Les étudiants français ont exprimé des odeurs de choses existantes, telles que la nourriture ou les aromates, tandis que les étudiants japonais ont eu tendance à exprimer des choses invisibles, comme les odeurs qu'évoquent les phéromones ou la passion.

En résumé – le parfum et l'invisible

Le terme « invisible » semble porter en lui une nuance de négation et d'absence.

Cependant, de même que pour le *kôdô*, art du parfum japonais, les odeurs invisibles, même si on ne les voit pas, ont un sens positif qui n'est pas dans la négation. Elles incitent, en se montrant volontairement dépourvues de centre, à utiliser notre imagination.

Cette approche artistique ne concerne pas uniquement le *kôdô* et les blancs dans les anciennes peintures japonaises et les haiku. Elle a une grande influence sur ces contenus japonais d'aujourd'hui que sont le manga et l'animation. Mon attention se porte en particulier sur la chanteuse virtuelle Hatsune Miku, qui a également joué un opéra virtuel il y a deux ans à Paris. En tant qu'existance visible, elle est dotée d'une silhouette assez réaliste et chante lors de concerts et d'opéras, mais son visage, lui, est celui d'un personnage d'animation. C'est là l'envers de l'attachement des Japonais pour l'invisible, qui s'amuse d'icônes visible et en même temps invisibles.

C'est sur ces mots que je souhaiterais conclure mon intervention sur le parfum et l'invisible du point de vue du concept de « décentré » dans la culture japonaise. Je vous remercie pour votre attention.

附記：

この講演録は、2015年５月９日に、フランスのパリ日本文化会館で開催された「香り芸術の美学」という嗅覚芸術の講演会で、「香りと見えないもの―日本文化における「中心の不在（décentré）」」と題して行われた講演原稿に、加筆修正を行ったものである。

講演会のプログラム内容としては、前年2014度に同じくパリで５月23日、24日と二日にわたってソルボンヌ大学で催された学会、COLLOQUE INTERNATIONAL *LA CREATION OLFACTIVE*を、パリ在住の石井 フォレ 暁子さんがより一般向けに市民講座的な内容に改編したものであった。Chantal JAQUETと私が香りの芸術について洋の東西からの哲学的視点で述べ、次にRoland SALESSEとDidier TROTIERとSophie DOMISSECKが嗅覚生理学的な視点から香りのアートが脳に及ぼす影響などを解説した。またアーティスト側からの香りのアートの作品紹介もあり、Boris RAUXとMaki UEDAが自らの制作について語った。

当日は定員200人ほどの日本文化会館が満席になるほどの盛況ぶりであり、一般市民の方々の香りアートに対する関心の高さに驚かされた。

この講演録にある「鹿威し」についての記述は、京都嵯峨芸術大学造形学科４回生の原田歌織さんの示唆によるものであり、ここに心からの謝意を表するものである。

最後に講演会開催に協賛をくださった笹川日仏財団に今回の講演会を含め、その他の日仏交流の企画に惜しみないご援助をいただいたことにも心からの感謝を謝辞として記す。

香りのアート／日仏学生交流　―京都とパリ

岩　﨑　陽　子*

はじめに

「香りについて考え、アート作品を制作する」ということは、自分自身の生活、文化、教養といったアイデンティティをさらけ出すことである。なぜならそれは、「リンゴ」などの目に見える形の輪郭をなぞる行為とは違い、この区切れ目のない匂いの世界総体に、自らの判断で境界線を引いて「香りの形」を他者に取り出してみせることだからである。アートによって可視化された「香りの形」は、この形を取り出した人自身の文化的背景の影響を受けている。人が自らの存在について根本から問うとき、何をもって「匂い、香り」となし、どのような手段でそれを可視化するかということが大切になる。それは目に見えるもののみに大きな価値観を与える現代社会への、一つの問題提起にすらなり得るだろう。

京都嵯峨芸術大学「味と匂い研究会」の中で、香りと造形芸術について実践的に研究・制作するPerfume Art Projectでは、上記のような問題意識から、香りにセンシティヴなフランスとの交流を通じて、そしてまた未来を担う若い感性の学生たちによって、上記の問いかけに対する応答を共に考えていく企画を実施した。これが、フランスのエコール・デ・ボザールの川俣正教授のゼミの学生と、京都嵯峨芸術大学のPerfume Art Project所属学生による香りのアート交流である。

交流の概要としては、京都とパリにそれぞれの大学の学生を交流のために招聘し、現地で共同制作を行い、香りアートの展覧会を行うというものである。京都では2015年３月９日から５月10日（駅ナカアートのみ６月13日まで）、パリでは11月１日から８日まで展覧会を実施した。

１．春の香りのアート交流（京都）

●参加者

京都嵯峨芸術大学　学生およそ25人（四短含む）
パリ・ボザール　学生11人、技術教員1人

●実施展覧会

・日仏学生交流@堀川団地
・日仏学生交流@kumagusuku
・日仏学生交流@MEISEI
・駅ナカアート@京都市営地下鉄（太秦天神川、京都市役所前駅）

●概要

2014年９月にパリ・ボザールの川俣教授とボザールのアトリエでお会いし、交流の具体的な話し合いを行った。その際、ボザール側と年に一度のゼミ旅行の一環として京都に来ること、そのスケジュールの中に香りのアート制作と展覧会を実施することで合意した。

帰国後もお互いの国で制作のアイデアを温め、2015年１月よりスカイプ等で実際の作品や展覧会についての打ち合わせを行った。１月８日にはパリで

*岩﨑陽子・・・Perfume Art Project代表

シャルリー・エブド襲撃のテロがあり、一時は来日できるかが危ぶまれたが、何とか企画の継続をすることになった。先行的に京都嵯峨芸術大学では「デザインチーム」を立ち上げ、企画のロゴ、フライヤー、HPのデザイン等を企画した。また会場の一つとして使用させていただくことになった、古い商店街と団地が一体型の建物「堀川団地」の商店街パンフレットも依頼され、その制作も開始した。

交流の構想として、日仏学生の混合による「共同制作」と「個人制作」を予定し、まずは共同制作の内容を決定することにした。１月半ばにはプロジェクト内の学生から多くの作品を募り（約20案ほど）、これらを掲示してメンバー内で投票を行った。日本側の中から6案を選出し、２月23日夜（パリでは昼）にスカイプで日本側からはこの６案、フランス側からは参加学生全員が、２時間半かけて香りのアートとしてお互いに英語でプレゼンした。作品のラフスケッチを用意して、熱気あふれる内容であった。その後、京都側はパリの、パリ側は京都の作品の中から２案を再選出し、合計４案の「共同制作」の内容が決定した。これらの４案は全て京都市営地下鉄主催の「駅ナカアート」で「太秦天神川駅」「京都市役所前駅」に共同制作として展示されることになった。

２月18日には、香りのアートで使用する特殊な香りをオーダーし、協力をしてくださることになった高砂香料工業株式会社平塚工場に学生５人と出向き、作品に使用する香料を選定した。調香師が「宇宙旅行」など、他にない香りをいくつもオリジナルに創ってくださり、それらのサンプルを決定していく作業は大変興味深いものであった。

２月23日には川俣先生とパリの学生たちが到着。翌24日には本学の食堂で歓迎パーティーを行った。そしてとうとう制作開始。駅ナカに展示する４案のグループ分けを行い、言葉の壁に四苦八苦しながらも制作を行った。京都側の学生は、最初はおとなしいように見えたが、途中からはあちこちで談笑している風景も見られ、アート制作におけるコミュニケーションの力の大きさを実感した。野菜をスタンプした≪cauliflower islands≫、匂いを嗅いでイメージする画像を写真コラージュした≪Someone's Memory≫、『失われた時を求めて』をテーマにした≪La petite madeleine≫、琳派400年を記念して尾形光琳の紅白梅図屏風に題材をとった≪紅白梅図―Bourgeons de fleur de prunier―≫などを香りのアートの共同制作として行った。

交流の合間にも、香老舗松栄堂による聞香体験や北野天満宮の天神市を見て回り、京都ならではの体験を共に行った。個人制作も実施した。

３月７日には京都現代芸術祭PARASOPHIAの開催と共に展覧会を開始。京都市役所駅前で共同制作のプレゼンを行い、京都市長に表彰され、作品内容について説明する機会を得た。

また市内３か所に学生たちの力強い個人制作が並び、たくさんの方々に香りのアートに触れていただく機会をつくることができた。

交流は大変なことの連続であったが、日仏学生たちのパワーを感じることができ、特に京都嵯峨芸術大学の学生の底力を実感させられた場であった。

２．秋の香りのアート交流（パリ）

春に引き続き、今度はパリに京都嵯峨芸術大学の学生を派遣し、香りのアート交流と展覧会を行うことになった。笹川日仏財団の協力を得て、学生５人と引率教員・岩崎陽子がパリに渡り、１週間にわたって制作・展示を現地で行った。

●展覧会参加者

京都嵯峨芸術大学　学生５人（四短含む）
パリ・ボザール　学生５人、ゲスト1人

●実施展覧会

FORME D'ODEUR
2015年11月１日－８日
パリ国際大学都市日本館

キュレーター /岩﨑陽子・Elsa MARC

●概要

交流期間が春よりも短かったため、事前にメールのやりとりなどで展覧会の内容を打ち合わせ、日本側は8割がた作品を日本で制作した上でパリに持参し、残りの部分を交流しながら制作するというスタイルをとった。これについての所見は以下。

●FORME D'ODEURについて（報告書より）

2015年11月13日金曜日は忘れ得ぬ日となった。フランス・パリでISによる同時多発テロが勃発し、120名を超える犠牲者が出た。ちょうどその週の始めにパリでの日仏香りのアート学生交流展“FORME D'ODEUR”を終えて日本に帰国していた私たちPerfume Art Projectの６人のメンバーはすぐに遠く離れたパリの仲間に安否確認を行った。幸い知り合いは無事であったが、つい数日前まで共に談笑しながら歩いた街並みの無残な映像を見た私たちは、言葉を失うしかなかった。宗教や政治、イデオロギーや人種の間に立ちはだかる寒々しく高い壁は、パリの街中やメトロの中でしばしば見かける、銃を持つ軍服姿の兵士や警官、明らかに貧しい暮らしを強いられている中近東の人々の無気力で暗い眼差しからも、体温としてじわじわと伝わってきていた。そうしたことの全ての結果が今回のこのようなテロを引き起こしたのだと考えると、事態の深刻さは遠く離れたアジアに住む私たちにとっても他人ごとではない切迫感を持って伝わってくる。私たちは大事な何かを見て見ぬふりをしてこなかったか。こんな時にアートに何ができるのか、特に香りのアートには。研究会のメンバー一人一人が自らの胸に何度も問いかけたことであろう。

春の交流から約半年後の10月末、この交流の成果を引き継ぎ、今度はホームとアウェイを入れ替えるかたちで、日本の学生がパリに滞在し、香りのアートの展覧会をパリの学生と共に、郊外に位置する国際大学都市日本館で行うことになった。今回は精鋭たちを選抜する形式で、春よりもかなり規模を縮小して実施した。日本側からは春の交流に参加していた大学院１回生の梅津順一（油画）、四大４回生の竹内智子（観光デザイン）、短大専攻科２回生の高尾みなみ（日本画）、四大３回生の木暮愛李（デザイン）、そして今年入学して新たに加わった短大１回生の山田埜（日本画）の５人がパリに渡ることになった。パリ側には春に交流を行った中からキュレーターの岩﨑が５人にオファーを送り、計10名の日仏香りのアート学生交流がパリで実現することになった。

春の交流の成果を生かし、全員が新たに香りのアートのオリジナル制作をすることを約し、夏休み前から京都とパリで学生たちは各々制作の構想を練り始めた。９月に入ってからは英語による制作プロポーザルの提示や広報の準備などを学生たちの手で行い、お互いの制作案を練り上げていった。展覧会の名称やフライヤーのデザインなども学生たちがアイデアを出し合い、メールのやり取りで次々と準備も進めていった。この時期、日本側では京都出町柳桝形商店街に位置するイベントスペース「Deまち」のお声掛けにより、2015年10月10日～12日の間、「Perfume Art Project @Deまち」（香りのアートミニ展覧会）を開催させていただくこととなった。メンバーは忙しい中でもこの機会を「パリの展覧会の前哨戦」と位置づけ、この日に照準を合わせて作品完成を試み、万全の態勢で展示に臨んだ。しかし実際に作品を展示したり、パフォーマンスを行ったりすると、様々な問題点や反省点が見えてくる。この経験を生かして作品最終調整の追い込みを行い、とうとう10月29日にメンバー全員が作品を引っ提げてパリで合流することができた。

パリ到着の翌日にはボザールを訪問し、制作の相談や搬入の打ち合わせを行い、また会場となる国際大学都市日本館のスペースを確認した。それからはとにかく制作、制作の毎日。華の都パリにありながらストイックな制作の日々を過ごしてようやく11月１日のヴェルニサージュ（展覧会初日）を迎えることが出来た。当日は非常に盛況で、オープン直後に行われた山田埜のパフォーマンスには80人近い人々が訪れ、終日総計100名を超えるパリの一般市民や

留学生、通りすがりの人々が香りのアート展を満喫した。あちこちでライブ音楽が鳴り響き、音楽に合わせて踊る人や歌う人。その楽しげでオープンな態度には日本での「展覧会」という堅苦しい制度にはない率直さや温かさがあり、芸術をより身近に楽しむ積極的な心持ちが見てとれた。

本展覧会の制作過程や各作品内容については、ここでは割愛する。私はキュレーターとして大したナビゲートもせず、制作に口を出すことはほとんどなかったが、日本の学生に一つのことだけは伝えた。それは「何か素材に匂いを付けたら香りのアートになるのではない」ということである。「香りのアート」と聞いて思い浮かべがちなのは、造形芸術に何らかの付香がしてあるものか、特殊な香りをもつものを通じて文化的背景を問うもの（フランスのチーズや日本の納豆など、主に食品）である。このような作品は残念ながら春の交流でもいくつも見られた。そうしたクリシェを越えて、香りに何ができるか。それが春の交流を越えるための、私から学生へ課したたった一つの課題であった。香りとは何かの匂いだけではないこと、それは空間を形成していること、空間には匂いだけではなく音、光、温度、湿度が存在し、目に見えるもの以上に、目に見えないものでありながら私たちに多大な影響を与えていること。香りのアートとはそうした「空間」の創出、またそれへの気づきと、それらを通じた視覚に頼らない新しい世界観なのである。

空間の相違にセンシティブに気づくことを願って、今回の交流では学生たちにあえてホテルをとらず、パリ滞在中の６泊を、私と共にパリ在住の嗅覚アーティストのBoris RAUXの自宅に滞在してもらうことにした。個人宅に宿泊して異国の生活文化の違い（衣食住すべてにわたる）を目の当たりにし、どっぷりと体感することによって、生活の中に占める香りや匂いの役割に気づくことが多かったはずである。見たこともない素材で調理をし、体を洗い、眠ること。こうしたこと全てが香りの展覧会の内容を下支えし、あらゆる活動に影響を及ぼした。また言語の壁の問題も痛烈に感じ取り、せめて英語が話せるようになりたいと帰国後に改めて語学の勉強を始める者もあった。

こうした展覧会開催にとどまらない、身体ごと浸るような交流活動を終えて帰国した直後に目にしたのが、パリでのテロのニュースであった。人間は日常生活すべてにわたってクリシェに侵されながら生きている。特に視覚的なものによる紋切り型の判断は世に溢れている。様々な「許せないこと」「我慢できないこと」「抹殺したいこと」を形成するものの根底を見つめるために、あらゆる判断を一旦保留すること。それは容易な試みではない。しかし目を閉じ、耳を澄ませると立ち現れる「空間」に身を浸すとき、そこに現れて来る新しい世界を、香りのアートを通じて生成させることはできないだろうか。学生の考えた今回の展覧会名称“FORME D'ODEUR”とは、「匂いの形」という意味である。目に見えない匂いを、形をもつ造形芸術として提示する際、人は必ず自らの被っている文化的フィルターの存在を体感する。匂いを形にする行為は、自らの、そして同時に他者の在り方についての、鋭く深い省察の方法の一つなのである。

今回交流に参加した若い日仏の学生たちはその第一歩を踏み出したばかりである。FORME D'ODEUR展が着手しつつも積み残した課題はまだまだあり、次の一歩をためらってはいられないのである。

http://perfumeartproject.com

Perfume Art Project